

二宮町立二宮小学校

研究テーマ：9年間を見通した共通性と一貫性のある指導・支援を通した、
「学びに向かう力」の醸成と資質・能力を育む指導のあり方(3年次)

1 実践の目的

二宮町では、令和5年4月より町内すべての学校が1つの施設分離型小中一貫教育校『にのみや学園』となった。学園の開校に向けて、にのみや学園の教職員全員の願いや想いを紡ぎ、教育目標を次の通り定めた。

『認め合い 高め合う 二宮の子』

この教育目標を実現するために、子ども同士の学び合いや話し合いを中心とした授業づくりに学園全体で共通性と一貫性をもって取り組んでいる。学級づくりの基盤や学習の進め方を揃えることで、子どもたちが安心して学んだり、進級したりできるようにするとともに、9年間を見通して子どもたちに必要な資質・能力の育成を図ることができると考える。

子どもたちに育みたい資質・能力を学園内で共通理解を図り、授業づくりを進めることを大事にしている。

二宮町で育みたい汎用的な資質・能力		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
①主体的に継続して勉強する	①必要な情報を集めて分析する	①多様な価値感の仲間を増やす
②多様な学びで知識を吸収する	②状況に応じて適切に判断する	②互いの違いを認め高め合う
③知識を応用して上手に使う	③論理的で柔軟に思考する	③誇めずに自分の夢をかなえる
	④自分の考えを正しく伝える	

授業づくりでは、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」を意識し、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力・人間性を一体的に育てて

いくための授業改善を図ることを意識している。

特に、3年次となる令和5年度においては、学びに向かう力を高めていくために、以下の内容も研究の視点に加えて取り組んだ。

- ・習得の授業における子どもの主体性
- ・日常生活や学校生活との関連付け
- ・学習活動や単元全体の目的意識の共有

2 実践の内容

(1) 研究体制

今年度も引き続き、教育力向上アドバイザー吉新一之氏（元川崎市立川崎小学校長）を講師に迎え、指導・助言を仰いでいる。

(2) 研究授業、研究協議の様子

今年度は、道徳科に教科を絞り、研究を行った。道徳の教科内容・指導法について認識を深め、共通理解を図るため、以前指導をお願いしていた、岐阜聖徳学園大学准教授の山田貞二先生に再度講師をお願いした。



1学期には、2回研究授業・全体会を行った。4年生「友情・信頼」の授業では、主人公の立場ならどう行動するかを、心情軸とネームプレートを使うことで、自分の考えをもち、その後の意見の交流が円滑に行えるよう手立てをとった。また、主人公だけでなく、相手側の心情を追うことで、多角的な視点を取り入れることができた。全体会では、中心発問で考えを広げて意見を集めてから、収束に向かっていく話し合いになっていたという意見が出された。



2年生「善悪の判断」の授業では、話し合いに入る前に、立ち歩きの意見交換を行って、発言しやすい雰囲気を作った後に、全員挙手や相互指名を取り入れた。全体会では、話し合いのルールやハンドサインが定着していたという意見が出た。

1学期には、その他の学年でも、学年で作成した指導案をもとに、全員が授業を行った。また夏季休業中には、11月に行う道徳教育研修会に向けて、全学年が指導案検討会を行った。



11月には、全学級授業公開を行った。児童全員が自分の意見をもって授業に参加できるよう心情円盤やデジタルの心の数直線などを活用したり、話し合いで出された意見をYチャートやベン図などを使って板書をし、意見の違いが明確になるような取り組みを行ったりした。

参観された先生方からは、「自分の気持ちや考えを表すためのツールが良かった」や「あたたかい雰囲気ですぐに授業が行われていた」、「多くの児童が話し合いに参加する姿が見られた」などの意見をいただいた。



3 実践の成果

道徳という1時間で完結する教科で、多くの児童が参加できる発問や展開を考えて授業を組み立て、いかに深く児童に考えさせられるかなど、講師のお話をもとに、教師がそれぞれ個人・学年で深く検討することができた。学校全体で一つのことに取り組めた充足感もあった。

4 今後の展開

今年度道徳科で培った話し合いや板書の仕方などを、他教科にもう一度広げていく。学級経営を通じた受容的な集団づくりを維持しつつ、自らの経験や考えを伝えたり、友達の意見と比べて質問をしたりする話し合いを通して、新たな考えをつくり出す授業を目指していきたい。